

P3-4 当施設における四肢末端難治性潰瘍の治療

松田範子¹⁾²⁾ 秋丸琥甫²⁾ 木山輝郎²⁾
宮本正章³⁾ 徳永 昭⁴⁾ 森山雄吉⁴⁾ 坂本篤裕¹⁾
田尻 孝²⁾

- 1) 日本医科大学付属病院 ME部
- 2) 日本医科大学付属病院 外科
- 3) 日本医科大学付属病院 内科・再生医療科
- 4) 日本医科大学武蔵小杉病院消化器病センター

【目的】当施設では、1970年1月以降、高気圧酸素治療(HBO)を施行している。近年、下腿潰瘍及び四肢末端循環障害(難治性潰瘍)症例が増加しており、再生医療との併用も含めた治療およびHBOの効果について検討した。

【方法・対象】第2種装置(羽生田鉄工製パナコンS1000型)で純酸素吸入し、空気加圧2.8ATA下で施行した。対象は、2000年1月～2007年7月までの期間にHBO治療を施行した難治性潰瘍症例である。

【結果】総症例数は88例で、2000年が1例、以降5例、13例、8例、7例、6例、29例、19例と特に2006年以降急増している。主な対象疾患は閉塞性動脈硬化症、バージャー病、うっ滞性皮膚炎などの末梢循環障害は49例(55.7%)、膠原病(強皮症、SLE、レイノー病、混合性結合組織病、関節リウマチ、結節性多発性動脈炎、など)が18例(20.5%)、糖尿病性潰瘍は14例(15.9%)で他は蜂窩織炎などであった。治療回数は4～92回であった。治療効果は改善または完治を有効とすると75例(85.2%)に有効であった。

【結語】難治性潰瘍の治療に際してのHBOの効果は、①末梢循環障害においては血流の改善を行った後、②さらに感染が制御されている状態、また③膠原病に関しては少ない回数で、高い治療効果が得られた。

P3-5 重症下肢虚血に対するHBOの経験

大浦紀彦¹⁾ 栗田昌和²⁾ 白石知大²⁾ 波利井清紀²⁾

- 1) 杏林大学医学部救急医学・形成外科
- 2) 杏林大学医学部形成外科

高気圧酸素療法(HBO)は、救急医学、脳外科において広く認知されているが、創傷治癒、難治性潰瘍の領域では、その効果は知られているものの、臨床においては、実際にHBOを施行している施設はまだ少ない。またHBOをどのような難治性潰瘍に使用すべきか、検討の余地がある。

重症下肢虚血に対する第一の治療は、虚血肢に対する血行再建であるが、全身状態や広範囲の閉塞など、バイパス術やPTAの適応にならない症例では、大切断を選択せざるを得ない場合がある。

今回、われわれは、血行再建ができない重症下肢虚血症例に対して、HBOを施行し、良好な結果を得たので報告する。

症例は3例で、いずれも感染による蜂窩織炎とびらんを伴っていた。1例は広範囲の感染、壊死を伴っていた。血管造影、または、皮膚灌流圧を計測し、虚血と診断され、HBOの効果があれば、上行性の感染に対する予防的な切断を計画していた。全症例で約1週間でびらんは治癒し、1例は、切断をすることなく、救趾でき、もう1例は、切断する範囲を必要最小限にすることが可能となった。血流量が乏しく、軟部組織がギリギリの状態で生存し、さらに感染を伴っている場合には、感染の制御目的のデブリードマンが必要であるが、デブリードマンの刺激によって、壊死が進行する状況をたびたび経験する。今回経験した3例は、積極的なデブリードマンは施行せず、ドレナージ目的の切開程度にとどめた。HBOによって、感染と壊死の進行を阻止し、生存域が安定した時期に、必要最小限の軟部組織除去することで、救肢が可能となった。

重症下肢虚血において、血行再建が不可能な場合、大切断か、または一部の施設で行われている骨髄幹細胞移植や遺伝子治療が適応と考えられていたが、侵襲の少ないHBOも選択枝の一つとすべきである。